

スコトゥスの個体化の理論に対する オッカムの批判

渋谷 克美

1 序

ソクラテスとプラトンは、ともに人間性という共通な本性を持つ点では一致するが、然しそれぞれ別な個物（この人間とあの人間）であるという点では異なっている。では、ソクラテスを、プラトンではなく、まさにソクラテスたらしめているものとは一体何であろうか。あるいは、この石がまさに或る一つの不可分な物であり、あの石から区別される根拠とは一体何であろうか。スコトゥスによれば、事物はそれ自体の本性（人間であること、石であること）によって個物たるのではなく、その共通本性をこのもの、この個体へと特定化する個体的差異 *differentia individualis contrahens*（このもの性）が共通本性に付加されなくてはならぬ。これがスコトゥスの言う個体化の原理であり、この原理は、或る特定の質料 *materia signata* やその他の附帯的な性質ではなく、個物に本質的に内在している原理である。

スコトゥスは、これら共通本性と個体的差異（このもの性）の関係について、「両者は同一の事物の、形相的に異なる二つの存在性 *realitates eiusdem rei, formaliter distinctae* である」と述べている¹⁾。スコトゥスの説の特徴は、実在的に同一の事物のうちに、更により原初的な区別を措定し、共通本性とそれを特定化する個体的差異（このもの性）との間に「形相的区別」*distinctio formalis* を立てたことである。共通本性と、それを特定化する個体的差異 *differentia individualis contrahens*（このもの性）との間に、実在的区別 *distinctio realis* ではなく、形相的区別 *distinctio formalis* が措定される理由を、スコトゥスは次のように説明している。①実在的区別が成立するのは、

例えばソクラテスとプラトンの場合のように、事物 *res* と事物 *res* の関係においてである。然し、共通本性と個体的差異の関係は、*res* と *res* の間の関係ではなく、同一の *res* における二つの存在性 *duae realitates* ——可能態と現実態・完成態—— の間の関係である。共通本性は、いわば可能態が現実態によって現実化され完成されるごとくに、個体的差異によってこのものへと現実化される²⁾。

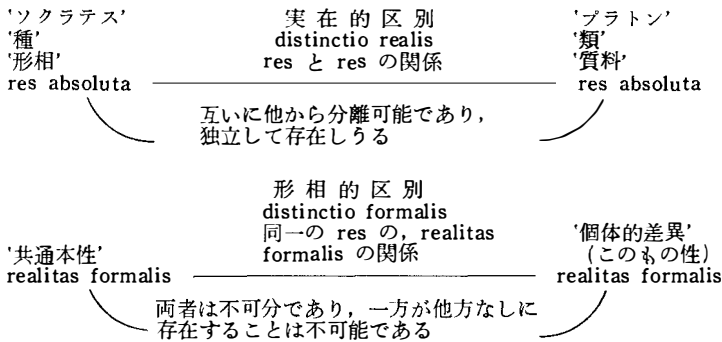
②然し、共通本性と個体的差異（このもの性）との関係は、類と種の間とも相違する³⁾。類と種の間には、実在的区別が成立している。他方、共通本性と個体的差異（このもの性）の間には、形相的区別が成立する。もし X と Y が実在的 *realiter* に異なる場合には、X と Y は分離可能であり、或る時に或る場所において、X は Y なしに存在することが可能である。X と Y が形相的 *formaliter* に異なる場合には、両者が分離して存在することは不可能であり、X は Y なしに存在することが不可能である。

然るに、類（例えば動物性）と種（例えば理性的）は分離可能であり、一方が他方なしに存在することは可能である。それゆえ、類と種の間には、他から分離可能な独立して存在しうるものどうし *res absoluta* と *res absoluta* の関係であり、両者は実在的 *realiter* に区別される。これに対して、共通本性と個体的差異（このもの性）は不可分に結びついており、一方が他方なしに存在することは不可能である。それゆえ、両者は実在的 *realiter* ではなく、形相的 *formaliter* に区別される。

③更にまた、共通本性と個体的差異（このもの性）との関係は、形相一質料の間とも相違する。スコトゥスによれば、一つの個体のうちに二つの種類の結合が存在する。一つは、現実態における *res absoluta*（他から分離可能であり、独立して存在しうるもの）と、可能態における *res absoluta* の結合 *compositio ex re actuali et re potentiali* である。形相と質料の結合は、この種の結合であり、それゆえ形相と質料は、実在的 *realiter* に区別される。いま一つは、同一の *res absoluta* のうちの、現実態における *realitas* と可能態における *realitas* の結合 *compositio ex realitate et realitate actuali et*

potentia in eadem re である。共通本性と個体的差異（このもの性）の結合は、この種の結合である。それゆえ、形相的 formaliter に区別される⁴⁾。

①, ②, ③から、実在的区別と形相的区別の相違は、図のように理解される。



更にまた共通本性は、次のような特質を持つ。例えばソクラテスとプラトンは、人間性という共通本性を持ち、一つのグループにまとめられる。あるいは、ソクラテスとプラトンとこのサルは、動物性という共通本性を持ち、一つのグループにまとめられる。こうした共通本性の有する一 unitas は、このものやあのものといった「数的な一」 unitas numeralis とは別である。ソクラテスとプラトンとこのサルとこの石は、このものとあのものといった数的な一において、等しく異なっている。然し、ソクラテスとプラトンは、数的な一とは別な或る一を有する。あるいは、ソクラテスとプラトンとこのサルは、数的な一とは別な或る一を有する。スコトゥスは、このような共通本性の持つ一を、数的な一よりも「より小さい実在的な一」 unitas realis minor と呼ぶ。

このスコトゥスの理論を、オッカムは『センテチア註解』第一巻第二区分第六問題、『大論理学』Summa Logicae 第一部第十六章の中で批判している。本論文では、オッカムのスコトゥス批判を検討することによって、スコトゥスの理論が如何なるものであるのかを、より明確にしたい。

2 オッカムの批判 (I) ——形相的区別に対するオッカムの批判——

オッカムは先ず、スコトゥスが共通本性とそれを特定化する個体的差異 (このもの性) との間に「形相的区別」*distinctio formalis* を指定したことに対して、次のように批判している。

「スコトゥスの説に対して、二通りの仕方で反論することができる。第一に、被造物においては、形相的 *formaliter* に異なるものは必然的に、実在的 *realiter* に異なる。……なぜなら、もし本性と特定化する差異が全く同じものというわけではないとしたら、何か或る事が、これら本性と個体的差異のうち的一方について真に肯定され、他方について否定されることが有りうる。然るに、被造物においては、同一のものについて、同じ事が真に肯定され、同時にまた真に否定されることは有りえない。従って、本性と個体的差異は同一のもの *una res* ではない。議論の小前提は明白である。もし、同一のものについて、同じ事が真に肯定され真に否定されるとしたら、被造物における事物の相違を証明する、すべての方法が失われる。矛盾律が、事物の相違を証明する最も有力な方法だからである⁵⁾。」

スコトゥスの「形相的区別」に対するオッカムの同様の批判は、彼の『大論理学』*Summa Logicae* 第一部第十六章のなかにも見出だされる⁶⁾。これらのテキストにおいてオッカムは、「形相的区別は実在的区別へと還元される。それゆえ、実在的区別のみが指定されるべきであり、形相的区別は否定される」と主張して、次のように議論している。

(大前提) もしスコトゥスの言うように、*a* (本性) と *b* (個体的差異・このもの性) が形相的に異なり、全く同じものというわけではないとしたら、或る性質 *F* が *a* について肯定され、*b* について否定される。すなわち、*a* は *F* であり、*b* は *F* ではない。

(小前提) 然るに、同一のもの *eadem res* について、同じ事 *F* が肯定され、同時にまた否定されることは有りえない。すなわち、*a* と *b* が実在的に同一

eadem res であるならば、「aがFであり、かつbがFではない」ということは有りえない（不可弁別同一の原理）。或るものについて、矛盾する事柄（F, non F）が真である場合には、これらは相異なる res である。

（結論）それゆえ、本性と個体的差異・このもの性は実在的に同一のもの una res ではない。もし本性と個体的差異・このもの性が形相的に異なるとしたら、それらは実は実在的に異なっているのである。実在的区別のほかに、形相的区別を認めるとすれば、不可弁別同一の原理や矛盾律といった、事物の相違や同一を証明するあらゆる方法が失われることになる。

〔オッカムの批判(I)の検討——オッカムの批判は正しいか？——〕

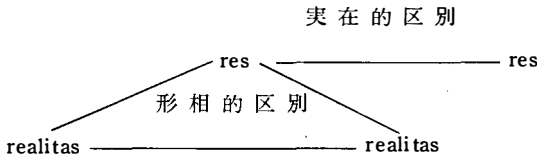
このオッカムの批判は正当なものであろうか。私は、オッカムの批判は正しくないと考える。なぜなら、スコトゥスは形相的区別と実在的区別との間に、存在のレベルの相違を設けているからである。このような存在のレベルの相違を設定することによって、不可弁別同一の原理や矛盾律を犯すことなく、スコトゥスの言う形相的区別を認めることができる、私は考える。以下、私の主張を更に詳しく論ずることにしたい。

①前述のごとく、スコトゥスの個体化の理論の特徴は、同一のもの res のうちに、更により原初的な区別を措定したことである。スコトゥスは次のように述べている。

「共通であるが限定されることが可能な各々のものはすべて、(如何にそれが一つの res としてあるとしても) 形相的に区別された複数の存在性 realitas へと更に区別されうるのであって、それらの一方は形相的には他方ではなく、一方は形相的に個別（個体的差異）の存在性であり、他方は本性の存在性なのである。……これら二つの存在性 realitas は、res と res としてあることはできない。——それらは、常に同一のもののうちにある（部分のうちにあるであれ、全体のうちにあるであれ）、同一の res の形相的に区別された二つの存在性 realitates eiusdem rei, formaliter distinctae である⁷⁾。」

このテキストから、次の事が明らかである。スコトゥスは、(一) res と res

(互いに他から分離可能であり、独立して存在しうるもの) と、(二) 同一の res のうちに属している realitas と realitas (不可分であり、一方が他方なしに存在することが不可能なもの) との間に、存在のレベルの相違を設定している。(一)の res と res との間に実在的区別が成立し、(二)の realitas と realitas との間に形相的区別が成立する。



オッカムは、これらの存在のレベルの相違を認めようとしなない。然し私は、このスコトゥスの提案を、存在の考察に際して有用なものと考え、私は D. P. Henry の記号⁹⁾を用いて、個体的差異の realitas (例えば、ソクラテス性 σ) と共通本性の realitas (例えば、人間の本性 α) の形相的区別を次のように

$$\{\sigma\} \neq \{\alpha\}$$

表すことにしたい。この形相的区別 $\{\sigma\} \neq \{\alpha\}$ は、res a と res b の実在的区別 $(a) \neq (b)$ とは明確に異なる。両者においては、同一や区別ということが、それぞれ異なる存在のレベルにおいて語られているのだからである。

②不可弁別同一の原理、矛盾律の適用範囲の拡張——これらの規則は、オッカムの言うように res と res の存在のレベルのみに成立するものではなく、realitas と realitas の存在のレベルにおいても成立する。realitas σ と realitas α が形相的に同一の realitas $\{\sigma\} = \{\alpha\}$ であるならば、「 σ が F であり、かつ α が F ではない」ということは有りえない。

③前述のオッカムの議論を、①で用いた記号によって表わすならば、次のようになる。もしスコトゥスの言うように、個体的差異・このもの性 σ と共通本性 α が形相的に異なる $\{\sigma\} \neq \{\alpha\}$ としたら、 σ は F であり、 α は F ではない。然るに、res a と res b が実在的に同一 eadem res $(a) = (b)$ であるならば、a が F であり、かつ b が F ではないということは有りえない (不可

弁別同一の原理). それゆえ, 個体的差異・このもの性 σ と共通本性 α は 実在的に同一のものではない non sunt una res (*Sent.* I, d. 2, q. 6, *OTH*II, p. 174, lin. 3). $(\sigma) \neq (\alpha)$. 従って, もし本性と個体的差異・このもの性が形相的にことなるとしたら, それらは実は実在的に異なるのである. すなわち, オッカムの議論は次の式で表わすことができる.

$$\{\sigma\} \neq \{\alpha\} \rightarrow (\sigma) \neq (\alpha)$$

然し, オッカムの議論の結論 $(\sigma) \neq (\alpha)$ は明らかに, 存在のレベルを混同する誤りを犯しているが故にナンセンスである. なぜなら, $() \neq ()$ は res の存在のレベルにおける, 二つのものの相違を表わす記号であるのに, σ 個体的差異・このもの性や α 共通本性は *realitas* の存在のレベルにおけるものだからである. オッカムは, 存在のレベルの相違を無視している.

オッカムの議論は, 次のように訂正されるべきである. *realitas* σ と *realitas* α が形相的に同一の *realitas* $\{\sigma\} = \{\alpha\}$ であるならば, 「 σ が F であり, かつ α が F ではない」ということは有りえない (②不可弁別同一の原理の適用の範囲の拡張). 然るに, 個体的差異・このもの性 σ は或る性質 F であり, 共通本性 α は F ではない. それゆえ, 個体的差異・このもの性 σ と共通本性 α は形相的に同一のものではない.

$$\{\sigma\} \neq \{\alpha\}$$

かくして我々は, 不可弁別同一の原理や矛盾律を犯すことなく, スコトゥスの言う形相的区別を認めることができる.

更にまた, D. P. Henry の指摘するごとく⁹⁾, 『大論理学』*Summa Logicae* 第一部第十六章のなかでの, オッカムのスコトゥス批判もまた, *res* と *realitas* の存在のレベルの混同に基づいている.

3 オッカムの批判 (II)

第二にオッカムは, スコトゥスの個体化の理論の内部に矛盾が存在することを指摘している.

「第二には, 前述の説に反対して, たとえ仮に此の様な形相的な区別が

成立するとしても、この説は正しくないことが論じられうる。最初の議論は次のごとくである。相対立するもの (A, B) の一方 A が或るもの C に実在的に属し、それゆえ真に、実在的に、C は A であると呼ばれる場合には常に、A が自らの力によって C に属する場合であれ、他のものによって C に属する場合であれ、——この事が存続し、変化しない限り——、相対立するものの他方 B が C に実在的に属することはなく、むしろ無条件に、C が B であることが否定されるであろう。然るに、あなた (ドゥンス・スコトゥス) によれば、或るものは自らの力によって個であり、或るものは付け加えられたものによってのみ個であるとしても、心の外のものすべて、実在的に個であり、数的に一 *unum numero* である。それゆえ、心の外のものを実在的に共通なものであることはない。更にまた、個別性の一 (数的な一) と対立する一によって一であることもない。従って、個別性の一 (数的な一) 以外には、実在的に如何なる一も存在しない。¹⁰⁾

オッカムは、次のように議論している。スコトゥスの個体化の理論は、三つのテーゼを含む。

(T1) 外界の実在の世界において、本性は共通であり、数的な一よりもより小さい一を持つ。

(T2) 外界の実在の世界においては、本性も、それを特定化する個体的差異 (このもの性) も、或る個物の構成要素としてのみ存在する。従って、本性が個体的差異を伴わずに存在することはできない。

(T3) 個体的差異 (このもの性) と結びついて、個物の内に存在する限りにおいて、本性は個物的であり、数的に一である。

(T2) \wedge (T3) から、

外界の実在の世界において、本性は実在的に個であり、数的に一である。

然るに、次の論理規則 (R) が成立する。相対立する性質 (A, B) のうちの一方 A (個であり、数的に一である) が或るもの C (本性) に属する場合には常に、他方の性質 B (共通であり、数的な一よりも小さい一である)

はC（本性）に属さない。

それゆえ、(T2) ∧ (T3) と論理規則 (R) から、次の命題が導き出される。

外界の実在の世界においては、本性は共通なものでも、数的な一よりも小さい一でもない。

この命題は、(T1)「外界の実在の世界において、本性は共通であり、数的な一よりも小さい一を持つ」と矛盾する。従って、スコトッスの個体化の理論の内部に矛盾が存在する。

〔オッカムの批判 (II) の検討〕

M. Adams は、「このオッカムの批判は、スコトッスの理論にとって致命的なものである」と述べている¹¹⁾。然し、私はそうとは思わない。

〔I〕先ず第一に、Tweedale¹²⁾ も Adams に反対して指摘しているごとく、オッカムがスコトッスの個体化の理論のテーゼとして挙げた (T1)「外界の実在の世界において、本性は共通であり、数的な一よりも、より小さい一を持つ」そのものが、スコトッスの精妙な理論を覆い隠している。実際には、スコトッスは次のように述べている。

テキスト① (*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 32)

「本性は、実在的には、これら個別的なものの中の或るものであることなしに存在することはないが、然しそれ自体においては de se、これら個別的なものの中の或るものではない。これらすべての個別的なものよりも、本性的により前なるものである¹³⁾。」

テキスト② (*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 34)

「外界の事物においては、本性は何らかの個別性を伴っているが、然しそれ自体においては de se、本性は或る特定の個へと限定されているわけではない。本性は、それを個へと特定化する性質（個体的差異・このもの性）よりも本性的により前であり、本性的により前である限りにおいて、特定化する個体的差異・このもの性なしに存在することは、本性それ自体に反することではない。……外界の実在の世界においては、本

性はその存在性に基づいて、心の外に真なる実在的存在を有しており、この存在に基づいて、本性は自らに相応しい一を有する。この一は、個別性（このもの、あのもの）に対して中立 *indifferens* であり、それゆえ、どんな個別性の一（数的な一）とともに置かれようとも、このことは、本性の一それ自体に反することではない。（この意味で、「本性は、数的な一よりも、より小さい実在的な一を持つ」と私は理解する¹⁴⁾。）」

テキスト③ (*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 41*)

「特定化する或る個体的差異・このもの性が置かれるならば、本性は他の事物に内在することができないけれども、他の事物に内在することは、本性それ自体に反することではない¹⁵⁾。」

テキスト④ (*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 37*)

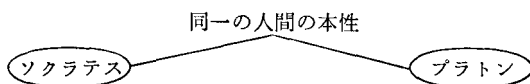
「現実態における普遍 *universale in actu* は、すべての個別的なものに対して中立的な一を有するものであり、この一によって、同一のものが、すべての個体について述語づけられうる。なぜなら、アリストテレス『分析論後書』第一巻によれば、「普遍」とは多くのものにおける、多くのものについての一だからである。然し外界の事物においては、——如何なる一によってであれ——確然たる一によって、すべての個体について、「これはこれである」と述語づけられうるようなものは存在しない。なぜなら、外界の事物のうちに存在する本性が、今現にそのうちに存在している個物(A)とは別な個物(B)のうちに存在するということは、本性それ自体に反することではないけれども、然しそのような本性は、「すべてのもの(A, B, …)はこれである」というふうに、すべての下位のものに真に述語づけられうるものではないからである¹⁶⁾。」

テキスト⑤ (*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 38*)

「外界の事物における本性は〈共通〉であり、それ自体においては de se、このものではない。従って、このものではなく、他のもの・あのものであることは、本性それ自体に反することではない。然しながら、このような共通な本性は、現実態における普遍 *universale in actu* ではな

い。なぜなら、それによって普遍が完全な意味での普遍となる、すべての個別的なものに対する中立性——すなわち、或る同一性によって、「すべてのものはこれである」というふうに、同じものがすべての個物に述語づけられうる根拠——を、このような共通本性は欠いているからである¹⁷⁾。」

これらのテキストから、次のことが判明する。「外界の实在の世界において、本性は多くのものに共通であり、数的な一よりも、より小さい一を持つ」というスコトッスの個体化の理論のテーゼ (T1) の「共通」という言葉の意味に、我々は注意すべきである。オッカムのスコトッス批判の議論のなかでは、「共通」という言葉が肯定的 positive な意味で用いられている。すなわち、オッカムはスコトッスのテーゼ「本性は多くのものに共通である」を、「同一の本性が同時に、多くの事物のうちに存在している」という意味に解して議論している。



然し、

テキスト①「本性は、実在的には、これら個別的なものの中の或るものであることなしに存在することはない」

テキスト②「外界の事物においては、本性は何らかの個別性を伴っている」

テキスト③「特定化する或る個体的差異・このもの性が置かれるならば、本性は他の事物に内在することができない」

から明らかのごとく、スコトッスは、「共通」という言葉を肯定的 positive な意味で用いてはいない。スコトッスによれば、外界の实在の世界において本性 (例えば人間の本性) は個体的差異・このもの性と結びついて、このもの (ソクラテス) の内に存在している。この限りにおいて、本性はこのもの (ソクラテス) に固有な、個別的なものである。

むしろスコトッスは、Tweedale¹⁸⁾ が指摘しているごとく、「共通」という言葉を、本性は或る特定の個物の内にも存在するように限定されているわ

けではないという、否定的 negative な意味で用いている。すなわち、スコトゥスは、「本性は多くのものに共通である」ということを、「本性は、それ自体においては de se、或る特定の個物の内にもみ存在するように限定されているわけではない」という意味で語っている。本性（例えば人間の本性）は、外界の实在の世界においては、個体的差異・このもの性と結びついて、このもの（例えばソクラテス）の内にも存在しており、この限りにおいて、本性はこのもの（ソクラテス）に固有な、個別的なものである。然し、ソクラテスの内にも存在している人間の本性は、それ自体においては de se、ソクラテスの内にもみ存在するように限定されているわけではない。テキストの①②③から明らかなごとく、本性はこのもの、あのものといった数的に一である個物よりも本性的により前 prior naturaliter であり、これらのものに対して中立 indifferens である。それゆえ、ソクラテスの内にも存在している人間の本性が、このもの（ソクラテス）の代わりにあのもの（プラトン）の内にも存在する、あるいは別の人の内にも存在することは、本性それ自体に反することではない non repugnare naturae de se. スコトゥスはこの意味で、「本性は多くのものに共通である」と主張しているのである。

更にまた、テキストの④⑤から明らかなごとく、スコトゥスの言う「共通本性」とは、不完全な、可能態における普遍 universale in potentia であって、完全な現実態における普遍 universale in actu ではないことに注意すべきである。外界の事物における本性は、今現にその内にも存在している個物(A)の代わりに、別の個物(B)の内にも存在する、あるいは他の個物(C)の内にも存在する可能性を有しており、それゆえ多くの事物の内にも存在することは、本性それ自体に反することではない。然しながら、このような外界の事物における本性は、現実態において、同時に、多くの事物の内にも存在し、多くの事物に述語づけられる（個物Aは本性 α を持つ、個物Bは本性 α を持つ、個物Cは本性 α を持つ、……）わけではない。それゆえ、スコトゥスの言う「共通本性」は現実態における普遍 universale in actu ではないのである。

オッカムは、「共通」という言葉に関して多義性の誤謬を犯している。

〔Ⅱ〕同様に、(T2) ∧ (T3)「外界の実在の世界において、本性は実在的に個であり、数的に一である」も、スコトゥスの理論を正確に表わしていない。実際には、スコトゥスは次のように述べている。

テキスト①(*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 8)

「この石の中に存在している本性にとって固有な、実在的で十分な一は、数的な一よりも小さい一である¹⁹⁾。」

テキスト②(*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 30)

「事物のうちに、数的な一すなわち個物に固有な一よりもより小さい、
或る実在的な一が存在する。この〈一〉は自体的に本性に属する一であ
り、この、本性としてある限りでの本性に〈固有な一〉に基づいて、本
性は個別性の一（数的な一）に対して中立である。それゆえ本性は、そ
れ自体においては de se, かの一、すなわち個別性の一（数的な一）に
よって一なのではない²⁰⁾。」

テキスト③(*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 173)

「もしあなたが、〈数的に同一の個体のうちにあるものはすべて、数的に同一なはずである〉と反論する場合には、次のように答える。……
表面は派生的 denominative に〈白いもの〉と呼ばれる。——それと同
様に、私は次のように言う。現実態においてあるもの actuale（個体的
差異・このもの性）によって特定化される可能態においてあるもの
potentiale（共通本性）は、この現実態におけるものによって形相づけら
れ、それゆえ、この現実態に伴っている一（数的な一）によって形相づけ
られている。かくして本性は、この現実態におけるもの（個体的差異・
このもの性）に固有な一（数的な一）によって〈一〉である。然しながら
本性は、派生的 denominative にこのような数的な一なのであって、
（決してそれ自体において de se 数的な一なのでも、第一の仕方におい
て primo modo 数的な一なのでも、本質的に per partem essentialem 数
的な一なのでもない²¹⁾。」

これらのテキストの①②から、次のことが明らかである。スコトゥスの理

論によれば、外界の事物、例えばこの石の中に存在している本性は、それ自体においては de se、数的な一よりもより小さい一を持つ。これがスコトゥスの真意である。

では何故スコトゥスは、(T2) ∧ (T3)「外界の実在の世界において、個体的差異・このもの性と結びついて、このものの内に存在する限りにおいて、本性は実在的に個であり、数的に一である」と述べているのであろうか。オッカムが主張するごとく、スコトゥスの個体化の理論の内部に矛盾が存在するのであろうか。これらの疑問に対する解答は、テキストの③から得られる。

スコトゥスは、「或るものが数的に一である」ことを、(一)それ自体において de se 数的に一である(二)自体的に第一の仕方において per se primo modo、本質的に per partem essentialem 数的に一である(三)派生的 denominative に数的に一であるに分類し、「外界の実在の世界において、個体的差異・このもの性と結びついて、このものの内に存在する限りにおいて、本性は派生的 denominative に数的に一である」と述べている。スコトゥスの理論によれば、可能態においてあるものが現実態によって形相づけられ、完成されるごとくに、本性は個体的差異によって、このものへと特定化され、個体的差異の持つ数的な一によって形相づけられる。この限りにおいて、本性は派生的 denominative に数的に一である。それは丁度、机の表面が白色の附帯的形相によって形相づけられている限りにおいて、机の表面そのものが派生的 denominative に「白いもの」と呼ばれるのと同様である。然しながら、机の表面の定義(本質)の中に白色が含まれていないのと同様に、本性の定義(本質)の中に「数的に一である」ことが含まれていない。それゆえ本性は、それ自体においては de se、数的に一ではない。すなわち、本性は派生的には denominative 数的に一であるが、それ自体においては de se、数的な一よりもより小さい一を持つ。

かくして、(T1)「外界の実在の世界において、本性は共通であり、数的な一よりもより小さい一である」と、(T2) ∧ (T3)「外界の実在の世界にお

いて、本性は個であり、数的に一である」が、矛盾しないことは明らかである。もしスコトッスが、「本性は派生的 denominative に数的な一よりもより小さい一であり、かつ数的に一である」、あるいは「本性はそれ自体において de se 数的な一よりもより小さい一であり、かつ数的な一である」と主張したのであれば、オッカムが言うごとく、スコトッスの理論の内部に矛盾が存在することになるであろう。然し、スコトッスが主張しているのは、「本性は派生的 denominative に数的に一であるが、それ自体においては de se 数的な一よりもより小さい一である」ということなのであって、このことは何ら矛盾を含んでいない。

4 オッカムの批判 (III)

更に、スコトッスの個体化の理論に対して、オッカムは次のように批判している。

「スコトッスによって、〈これらの本性（ソクラテスの中の本性、プラトンの中の本性）が異なるのは、それらに付け加えられた個体的差異によるのであり、それらが数的に一であるのも、付け加えられた個体的差異による。それゆえ、これらの本性はいずれも、それ自体においては個ではなく、それ自体においては共通である〉と言われるならば、これに反対して、私（オッカム）は次のように答える。すべてのものは、それ自身によって、あるいは、それに内在的なもの aliquid sibi intrinsecum によって、本質的に異なる他のすべてのものから本質的に区別される。然るに、ソクラテスの中に存在している人間の本性は、本質的に、プラトンの中に存在している人間の本性と異なる。従って、ソクラテスの中の人間の本性は、それ自身によって、あるいは、それに内在的なものによって、プラトンの中の人間の本性と異なるのであって、それに外的に付け加えられたもの aliquid extrinsecum additum illi によって異なるのではない。大前提は明白である。なぜなら、ソクラテスがプラトンによって、本質的にこのロバと異なるとは言えないからである。同様に、

同一であるとか、異なるとかいうことは、存在している事物に直接に伴うものであり、それゆえ、何物も自らに外的なものによって他の物と同一であるとか、異なるとかいうことはない。同様にアリストテレスやアヴェロイスの『形而上学』第四巻によれば、すべての事物は、本質によって一なのであって、付け加えられたものによって一なのではない。それゆえ何物も自らに付け加えられたものによって数的に一なのではない。従って、ソクラテスの中の本性は、もしそれが数的に一であるとしたら、それ自身によって、あるいは、それにとって本質的なもの *aliqua sibi essentialis* によって数的に一であるだろう²²⁾。」

オッカムは、スコトゥスの理論が次のルール (α) 「ものAが本質的に一であり、他のものBから区別される $A \neq B$ のは、A 自身によって、あるいはAにとって内在的なものによってであって、A に外から付け加えられた外的なものによってではない」に反すると批判している。スコトゥスによれば、本性は個体的差異・このもの性によって個体化され、数的に一であり、他の本性から区別される。然るに、個体的差異・このもの性は本性と形相的に異なるのであり、個体的差異・このもの性は本性に外から付け加えられた外的なものである。従って、スコトゥスの理論はルール (α) に反する。このオッカムの批判を正当なものと認めて、M. Adams はスコトゥスがルール (α) を否定したと述べている²³⁾。

〔オッカムの批判 (III) の検討〕

〔1〕然し私は M. Adams 教授に同意できない。スコトゥスはルール (α) に反してはいない。むしろ、個体化の問題についての議論の中で、スコトゥスはしばしば、このルール (α) を採用している。例えば『オックスフォード註解』(Ordinatio) 第二卷第三区分第二問題の中で、ガンのヘンリクスの説を反駁しながらスコトゥスは、「事物は何か外的なものによってではなく、事物に内在するものによって個体化される」と主張する。スコトゥスによれば、このものを不可分な一であり、他のものと異なるようにさせている何か、この石のうちに内在している。スコトゥスは次のように述べている。

「存在するものの中には、下位の部分へと分割されえないもの、すなわち多くのものへと分割されることが形相的にそれに反するものが存在する。……このように、多くのものへと分割されることがそれに反するということは、一体如何なる近接する内在的な根拠 fundamentum proximum et intrinsecumによってこのものに生ずるのかが問われているのである。この石の中の一体何が、近接する根拠となつて、多くのものへの分割がこの石に無条件的に反するということが生ずるのかが、このような事柄についての問いである²⁴⁾。」

それゆえ、スコトゥスは個体化の原理に関するルールとして、(α)を採用している。

[2] スコトゥスを弁護する立場から、私はオッカムに対して反論する。オッカムの議論は次のように要約される。スコトゥスが個体化の原理として指定した個体的差異・このもの性は、本性と形相的に異なるものであり、本性にとって外的なものである。それゆえ、個体的差異・このもの性によって、ソクラテスの中の本性Aが一であり、プラトンの中の本性Bから区別されるA≠Bというスコトゥスの理論はルール(α)に反する。

〈私の反論〉然しルール(α)は、スコトゥス自身が個体化の原理の問題を探究した際に用いたルールなのである。個体的差異・このもの性は確かに、本性にとって外的なものであるけれども、然し個物全体(例えばソクラテス、あるいは、この石)にとっては内在的で本質的なものである。従つて、スコトゥスの主張するように、個体的差異・このもの性によって、ソクラテスが不可分な一であり、プラトンから区別される、あるいは、この石が不可分な一であり、あの石から区別されることはルール(α)に反してはいない。オッカムの批判は正当ではない。

5 結 論

以上、私は、スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの批判の三つの主要な議論を検討してきた。オッカムは『センテチア注解』第一巻第二区

分第六問題の中で、スコトゥスの個体化の理論を批判し否定した上で、「如何なるものも、それ自身によって個である」というオッカムの存在論の最も基本的なテーゼを提出している。それゆえ筆者は、オッカムの存在論を研究する過程の中で、スコトゥスの個体化の理論に対するオッカムの批判の検討を試みたのであるが、これまでの考察から明らかとなったことは、意外にも、オッカムのスコトゥス批判はスコトゥスの側から十分に反論可能なものであり、必ずしも正当とは言えないということである。だとすると、「如何なるものも、それ自身によって個である」というオッカムの個体主義を、我々は少なくとも無条件には、容認することができないであろう。もし我々がオッカムの個体主義を採用するとしたら、我々は新たに多くの問題に直面することになる。例えば、我々が多くの個物を一つのグループにまとめて、普遍た例えば「人間」という名前で正当に呼ぶことができる根拠とは一体何であるのかという、スコトゥスの個体化の問題とはちょうど反対の、普遍化の問題が生じてくるであろう。オッカムがこれらの問題を如何に処理しているかを見てみるのが、私の次の研究課題である。

註

- 1) Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 188; Vaticana III 484.
- 2) *ibid.*, n. 189; Vaticana VII 484-485.
- 3) *ibid.*, n. 188; Vaticana VII 484.
- 4) *ibid.*, n. 189; Vaticana VII 484-485.
- 5) Ockham, *Sent.* I, d. 2, q. 6; *OTh* II, pp. 173, lin. 11-174, lin. 6.
- 6) *OPh* I, p. 54, lin. 11-14; p. 56, lin. 66-72.
- 7) Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 188; Vaticana VII 484.
- 8) D. P. Henry, "Ockham and the Formal Distinction", *Franciscan Studies* 25, 1965, p. 289; "Ockham and the Formal Distinction" in *Medieval Logic and Metaphysics*, Part III, §5, London 1972, p. 93.
- 9) D.P. Henry, "Ockham and the Formal Distinction" 1965, p.291; "Ockham and the Formal Distinction" in *Medieval Logic and Metaphysics* 1972, p.93.
- 10) Ockham, *Sent.* I, d. 2, q. 6; *OTh* II, p. 177, lin. 9-19.
- 11) Adams, Marilyn McCord, "*William Ockham*", University of Notre Dame

- Press, 1987, p. 53.
- 12) Martin Tweedale, "Critical Notice of M.Adams William Ockham", *Canadian Journal of Philosophy*, 1991, p. 222.
 - 13) Ed. Vaticana VII 403.
 - 14) *ibid.*, 404.
 - 15) *ibid.*, 409.
 - 16) *ibid.*, 406, lin. 11-407, lin. 5.
 - 17) *ibid.*, 407, lin. 20-408, lin. 3.
 - 18) Martin Tweedale, *op. cit.*, pp. 222-223.
 - 19) Ed., Vaticana VII 395, lin. 3-4.
 - 20) *ibid.*, 402, lin. 11-16.
 - 21) *ibid.*, 476, lin. 18-477, lin. 11.
 - 22) Ockham, *Sent.* I, d. 2, q. 6; *OTh* II, pp. 184, lin. 14-185, lin. 6.
 - 23) Adams, Marilyn McCord, "Universals in the early fourteenth century", in *the Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, Cambridge University Press, 1982, p. 420.
 - 24) Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 2, n. 48; Vaticana VII 413.